

## 恵泉 花の文化史(2)

# クレマチス

西村 悟郎(人文学部文化学科)

「数ある花壇植物の中で、あなたは何を第1にあげますか。」と問われれば、私はクレマチスをあげる。クレマチスはけっして人目を引く派手さも、人を驚かす珍奇さも備えていないが、花の色合いは見る人の心を落ち着かせ、植物や花の形は変化に富み、見る人を飽きさせない。日本ではクレマチスは鉢物として鑑賞される場合が多いが、花壇あるいは庭園に植えられたクレマチスの風情は格別なものがある。今回は、花壇あるいは庭園の植物材料としてのクレマチスの多様性について述べると共に、特にイギリスと日本のクレマチスに関わる文化の違いにも言及する。

クレマチスはキンポウゲ科に属し、約250種が全世界に分布する。日本には21種がある。多くはつる性であるが、直立するものもある。草本、半木本、木本があり、草本が多いので宿根草として扱われる。葉は1～数回の3出複葉、あるいは羽状複葉で、落葉性と常緑性がある。花は花弁を欠き、ガク片が花びら状になる。花の形は平開、杯状、鐘状、壺状などがある。クレマチスの育種は19世紀半ばからイギリスを中心に始り、今日までに多くの園芸品種の作出されてきた。特に、イギリスでは庭園の植物としてのクレマチスの人気が高く、優良品種が多く作出された。また、日本も育種が盛んで、多くの優良品種が作出されている。日本の優良品種には大輪・平開の花が多く、行灯作りなどの鉢植えにして鑑賞するのに向く。

クレマチスは花壇材料として次のような優れた面を持っている。まず、①多くの原種や交配種を含み、花の色や形が変化に富むこと、次に②種類によって開花期が異なり、植物を選ぶ事によって年間を通じて鑑賞できる。さらに③つる性や直立性など植物の形態に変化があり、花壇に植えたり、建物の壁や垣根につたわらせたり用途が広いなどがあげられる。クレマチスは園芸植物として最も多様性に富むものと言える。クレマチスの花壇・庭園における様相について、季節を追って以下に述べる。

## 1. 冬の日溜りで咲く

日本ではクレマチスといえばバラの咲く頃に青い花を咲かせるというイメージがあるが、冬から早春に寒風の中で咲くクレマチスもある。冬に咲くクレマチスとして先ず挙げられるのは *Clematis cirrhosa* (別名 *C. calycina*) である。南ヨーロッパから小アジアの原産で常緑のつる性。クリーム色で直径6cmほどのカップ状の花を下向きに咲かせる。冬枯れの庭に咲くこの花は、まるで宝石のように貴重な存在である。もう一つは *C. napaulensis* で、クリーム色のガク片の間から赤いおしべが目につく。日本では、これら冬咲きのクレマチスはまだあまり普及していないが、イギリスの庭園では普通に見かける。茎は細く、葉もあまり茂らないので、急いで歩いていると見過ごしてしまうほど、ひっそりと咲いている。特に、南向きのレンガ塀を背に、暖かい日溜りで咲く姿は、春近しを思わせる。

## 2. 春から初夏に咲く

4月になって暖かくなってくると *C. macropetala* (キクザキハンショウヅル) が花びらの先の尖った青紫色の花を咲かせる。ロシア、モンゴル、中国原産。つる性で花は平開し、おしべが弁化して八重になる。植物体は華奢で、数本で壁につたっている様子は、何となく危うげに見えるが、よく茂ってくると壁一面に葉を茂らせ多くの花をつける。イギリスではよく栽培されている。同じ時期に *C. alpina* も咲き出す。赤みを帯びた青色のガク片を4枚下向きにつける。中心に白が入る。ヨーロッパの山地原産で、イ

ギリスの庭園で咲きそろう様子が見られるが、日本では山草として扱われる事が多い。

5月に入ると最も重要なクレマチス1つである、*C. montana*が咲き出す。この時期のイギリスではこの花の咲いていないガーデンはないというほどに、4弁のクリーム色がかかった白のモンタナの花を見かける。中国、ヒマラヤの原産であるが、イギリスの気候によくあって、つるをよく伸ばしてたくさんの花を一斉に着ける。石造りの廃墟などに木化したモンタナのつるが絡み付いて花を咲かせている様子には古色蒼然という言葉が浮かんでくる。日本では夏の暑さで弱ってしまい、木化するところまでは育たない。日本ではやはり行灯造りにして鑑賞することが勧められる。

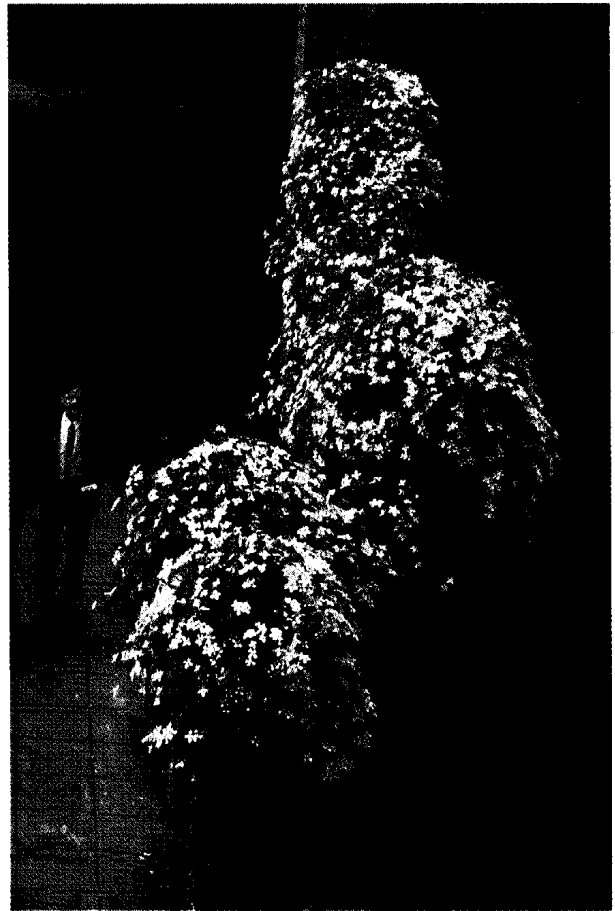


図1 *C. montana*

お城の城壁に咲くモンタナの古木。5月にはイギリスのいたるところでモンタナの花が見られる。

### 3.5～6月はクレマチスの最盛期

5～6月は日本ではクレマチスが最も美しい季節である。園芸店に鉢植えのクレマチスが並び、各地で品評会が開かれる。クレマチスを代表する2種がこの時期に咲く。まず、日本原産のカザグルマ (*C. patens*)は8弁で平開し、花径が10～15 cmになる。花色は淡紫色や白で、5～6月に咲く。古くから栽培され、17世紀の絵画に描かれている。日本ではクレマチスといえば平開したこのカザグルマの花形をイメージする場合が多い。また、中国原産のテッセン (*C. florida*)は6弁で、乳白色か黄色がかかったクリーム色で花の中央には濃紫色のおしべが盛り上がる。花径は6～10 cm。安

土・桃山時代以前には日本に入ってきたと考えられている。日本ではクレマチスのことをテッセンとよぶことがあるが、それほど人々によく親しまれている。カザグルマとテッセンを交配親にして、日本では大型で平開する名花が多く生まれた。一方、イギリスへはカザグルマとテッセンは19世紀の半ばにもたらされ、さらに中国原産のラヌギノーサ (*C. lanuginosa*) も加わって交配が進んだ。ラヌギノーサとヨーロッパ原産のヴィティセラを交配して有名な「ジャックマニー (*C. x jackmanii*)」が生まれ、夏から秋にかけてイギリスのガーデンを飾っている。これは4～6弁で花径9～10cm、濃紫色で多花性である。花の形は日本で作出された8弁や6弁の品種ほどには端正ではない。日本のクレマチスの育種の方法は一輪の花の形に拘り、端正な均整の取れた花が作出されてきたが、イギリスの交配の方法は一輪の端正さより集団としての花の美しさを重んじる。日本が鉢植えにして花を楽しむのに対して、イギリスでは庭園でつるを伸ばして大きなスケールで花を楽しむ、その違いが育種の方法を決定付けている。

#### 4. ボーダーで咲く茎が直立するクレマチス

イギリスでは6月から8月にかけて、夏のボーダーで *C. integrifolia*、*C. heracleifolia*、*C. stans* (クサボタン) などの茎が直立するクレマチスが用いられる。*C. integrifolia* はヨーロッパ原産で草丈60cmほど、茎の先端に紫色の鐘状の花を下向きにつける。花径は5cmで6月初めごろから咲き出す。決して目立つ花ではないが、クレマチスの存在感は大きく、この植物がそこにあるだけで、ボーダーの雰囲気が高められる気がする。*C. heracleifolia* は中国から朝鮮半島の原産で草丈80cmに伸び、淡青色の筒状の花を各節に輪生する。花期が長く8月頃から9月にかけて咲きつづける。その時期はボーダーの花も少なくなる時期なので、本種はボーダーの主役の一端を担う。クサボタンは日本原産で野草だが、草丈70cmで筒状で淡青色の小さな花を円錐花序につける。日本では花壇で見かけることはないが、イギリスではボーダーの一隅に植えられて夏から秋に咲くのを見かける。世界の異なる地域に原産するクレマチスをボーダーの中に取り込んで美しく配

置していくことはイギリスの気候とイギリス人の気質がなせる業である。

## 5. 夏から秋の庭園を飾るつる性のクレマチス

夏から秋にかけて咲きそろうのが *C. viticella*、*C. x jackmanii*、*C. rehderiana*、*C. orientalis* 'Bill MacKenzie' である。*C. viticella* は地中海沿岸原産で古くからイギリスでも栽培され、traveller's joy (旅人の楽しみ) という英名が付けられるほど人々に親しまれてきた。現在でも7月から8月にかけて、4弁の赤や紫の花が建物の壁づたいとか、ボーダーのスタンダード作りにされて数え切れないほどたくさんの花をつける。イギリスの庭園には欠かせない



図2 *Clematis heracleifolia* var. *davidiana* 直立性のクレマチスで、8月から9月のボーダーで存在感がある。その季節にはなくてはならない花となっている。

クレマチスである。そして、それよりさらにイギリスで人気があるのが *C. x jackmanii* である。上述のようにイギリスで作出された名花で4~6弁、花径8~10cm、つるがよく伸びて花をたくさんつける。夏から秋にかけてイギリス中の庭園で見かける。特に、石造りの建物に蔦って咲く様子はクレマチスの一番の晴れ姿である。

*C. rehderiana* はつるを長く伸ばし深緑の葉をよく茂らせる。その深緑の葉をバックに筒状の淡黄色の花を円錐花序につける。葉と花の色のコントラストが非常に美しい。満開に咲く美しさは息を呑むほどである。中国の雲南省から四川省の原産で、19世紀にイギリスにもたらされ8~9月の庭園を飾っている。9月頃から秋の最後を飾って咲くのが *C. orientalis* 'Bill MacKensie' である。黄色い肉厚の4弁の花を下向きにつける。つるがよく

伸びてたくさんの花を鈴なりにつける。花が終わると種が長さ3～4cmの銀色の翼を持ち、それが花ごとに銀色の塊になって秋の日を受けて美しく輝く。

### 参考文献

- 金子明人 クレマチス 講談社 2004  
君島正淋 クレマチス フルール園芸大百科事典 講談社 1980  
田村道夫・塚本洋太郎 クレマチス 園芸植物大事典 小学館 1989  
塚本洋太郎 クレマチス 朝日園芸百科 朝日新聞社 1984  
松本公造・早川 廣 クレマチス NHK趣味の園芸 2001  
ブリッケル編 A-Z園芸植物百科事典 誠文堂新光社 2003